

制作者研究 NEO 〈地域にこだわる〉

【第1回】吉崎 健 (NHK) 前編

～水俣 “魂の深か子”に出会って～

メディア研究部 七沢 潔

連載の開始にあたって

「テレビ番組は、どんな人の手で、なぜ、どのようにして作られてきたのか？」

そんな素朴な疑問に答えるべく、7年前の2012年、これまで番組研究の中であまり光が当てられてこなかったテレビ制作者の研究がスタートした。主にドキュメンタリーのディレクターやプロデューサー、カメラマン、編集者など、草創期からいまに至るまで活躍してきた18人の制作者について、番組の視聴と分析を軸に、著作など残された資料や関係者の証言をもとに研究を行い、成果を『放送研究と調査』に3年度にわたり連載した。2016年末には『テレビ・ドキュメンタリーを創った人々』(NHK出版)と題して単行本も上梓した。

このたび、新たにスタートする研究は、この制作者研究の後継研究にあたるが、NEOの文字を添えたように、若干の方針変更がある。

故人を含め、放送史に残る名番組を作った制作者たちを時代別に描いた前研究と違い、まず対象は基本的に現役の制作者とし、シリーズの区分は制作者の属性や取り組むテーマ、あるいは研究者の選択などを中心にする。

制作された番組の分析を軸とすることに変わりはないが、資料と並んで制作者自身へのヒアリングに重きを置き、その生の息づかいを大切に。そしてもう1点は関連する人脈に留意すること。テレビ制作者は大勢のスタッフと協業するのはもちろん、所属組織やそれ以外のさまざまな先駆者の仕事や助言者の影響を受けて仕事をしている。一人の努力だけでは到達できなかった成果もたくさんあるだろう。

今回の研究では、一人の制作者の背後にいる協力者像にも触れながら、テレビ番組制作の実相に近いところで制作者の生き方を見つめる。そうすることで、よりビビッドで参考になる教材を現場の制作者や研究者、関連する志望者たちに提供したい。

NEO研究の第1シリーズは、地域にこだわり、その風土と歴史の中で番組を紡いできた制作者たちにスポットを当てる。

第1回の本稿は、NHK福岡放送局のチーフ・ディレクター、吉崎健(53歳)について。1989(平成元)年にNHKに入局した吉崎は、衛星放送時代を前に地域放送が重視される中、高校まで育った故郷の熊本に赴任。入局3年目の1991年、25歳で水俣病事件に出会う。不知火海にチツソが垂れ流した有機水銀が原因で、魚介を食べた人々が中毒患者となったこの公害は、この年、1956年の公式確認から35年を経ていたが、近づいてみれば多くの未解決問題を抱えていた。以来28年、吉崎は水俣に関する番組を作り続け、いまでもこの終わらない事件について患者に近い場所から発信し続けている。本稿は前後編にわたり吉崎の作品とマインドの根幹に迫る。第2回は、地域の人々の戦争の記憶を掘り起こし続ける山口放送のディレクター、佐々木聰(48歳)の仕事を元日本テレビのディレクターの水島宏明(上智大学教授)が読み解く。第3回は、28年間仙台に居を置き、東北の風土に根ざした人の暮らしを撮り続けてきたNHKの伊藤孝雄カメラマン(69歳)の足跡を、JapanDocs¹⁾の渡辺勝之が見つめる予定である。

よしぎ たけし
吉崎 健



大好きな場所、熊本城・二の丸広場の楠の木の下で (撮影・芥川仁)

1965 (昭和40) 年、熊本市生まれ。県立熊本高校、一橋大学商学部を経て1989 (平成元) 年にディレクターとしてNHKに入局。赴任地となった故郷の熊本局 (1989-93) で初めて「水俣病」と出会う。その後、東京・番組制作局社会情報番組部 (1993-97)、長崎局 (1997-2002)、福岡局 (2002-05)、NHK九州メディス (出向:2005-08)、NHKプラネット九州 (社名変更・出向:2008-13) を経て2013年、20年ぶりに熊本局に戻る。2019年6月から福岡局チーフ・ディレクター。主なテレビ番組に、ある胎児性水俣病患者が撮った写真の展覧会開催までを追い、水俣病の現実を伝えた『写真の中の水俣』(1991・「地方の時代」映像祭優秀賞)、自ら被爆しながら平和のメッセージを書き続けた医師・永井隆の内面に迫った『長崎の鐘は鳴り続ける』(2000・文化庁芸術祭優秀賞)、水俣病の初期から作家と医師という異なる立場で患者支援に尽力した二人の“巨人”の人生を描いた『花を奉る石牟礼道子の世界』(2012・早稲田ジャーナリズム大賞ほか)、『原田正純 水俣 未来への遺産』(2012・放送文化基金賞テレビドキュメンタリー番組賞)、500人の録音テープから水俣病被害者の苦悩の歳月を描いた『水俣病魂の声を聞く』(2016・放送文化基金奨励賞ほか) などがある。2014年に芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

視聴した吉崎健の番組

熊本局時代 (1989-93)

WAVE くまもと『叫び～一人芝居・砂田明の水俣～』 1991.6.20 放送 28分 総合・熊本ローカル

九州スペシャル『写真の中の水俣～胎児性患者・6000枚の軌跡～』 1991.12.12 放送 45分 総合・九州沖縄ブロック
*「地方の時代」映像祭優秀賞

東京・社会情報番組部時代 (1993-97)

くらしのジャーナル『“水俣”を伝えたい～胎児性患者は今～』 1993.10.6 放送 32分 総合・全国放送

長崎局時代 (1997-2002)

ETV 特集『タイラギよ よみがえれ～長崎県・諫早湾～』 1999.2.25 放送 44分 教育・全国放送

特集『長崎の鐘は鳴り続ける』 2000.8.7 放送 43分 総合・全国放送 *文化庁芸術祭優秀賞

夏期特集『そして男たちはナガサキを見た～原爆投下兵士56年目の告白～』 2001.8.9 放送 44分 総合・全国放送
*アメリカ国際フィルムビデオフェスティバル・クリエイティブエクセレンス賞、平和・共同ジャーナリスト基金奨励賞

福岡局時代 (2002-05)

九州沖縄金曜日ポータル『遅すぎた認定基準見直し～カネミ油症 なぜ救済は進まないのか～』
2005.4.8 放送 25分 総合・九州沖縄ブロック

九州メディス時代 (2005-08)

九州沖縄スペシャル『水俣 それぞれの祈り～胎児性患者の50年～』 2006.5.12 放送 43分
総合・九州沖縄ブロック、(再放送) 総合・全国放送

プラネット九州時代 (2008-13)

九州沖縄インサイド『水俣病 埋もれていた被害者たち～大検診の衝撃～』 2009.10.9 放送 25分 総合・九州沖縄ブロック

ETV 特集『“水俣病”と生きる～医師・原田正純の50年～』 2010.5.16 放送 89分 教育・全国放送
*「地方の時代」映像祭優秀賞, ギャラクシー奨励賞

ETV 特集『花を奉る 石牟礼道子の世界』 2012.2.26 放送 89分 Eテレ・全国放送
*ギャラクシー選奨, 石橋湛山記念・早稲田ジャーナリズム大賞文化貢献部門大賞, 「地方の時代」映像祭選奨

特報フロンティア『水俣病被害者 すべて救済されるのか』 2012.5.18 放送 25分 総合・九州沖縄ブロック

ETV 特集『原田正純 水俣 未来への遺産』 2012.11.4 放送 59分 Eテレ・全国放送
*放送文化基金賞テレビドキュメンタリー番組賞

戦後史証言プロジェクト『日本人は何をめざしてきたのか 第2回 水俣～戦後復興から公害へ～』
2013.7.13 放送 89分30秒 Eテレ・全国放送 *「地方の時代」映像祭選奨

熊本局時代 (2013-19)

ETV 特集『ふるさと“水俣”に生きる～次世代からのメッセージ～』 2014.6.28 放送 59分 Eテレ・全国放送
*ギャラクシー奨励賞

戦後史証言プロジェクト『日本人は何をめざしてきたのか 第6回 近代とは何か 魂の行方 作家・石牟礼道子』
2015.1.17 放送 89分30秒 Eテレ・全国放送

くまもとの風『「苦海浄土」とその縁(えにし)』 2015.3.13 放送 25分 総合・熊本ローカル

ETV 特集『水俣病 魂の声を聞く～公式確認から60年～』 2016.5.28 放送 59分 Eテレ・全国放送
*「地方の時代」映像祭選奨, 放送文化基金テレビドキュメンタリー番組奨励賞

ETV 特集『わが不知火はひかり風(なぎ) 石牟礼道子の遺言』 2018.5.5 放送 59分 Eテレ・全国放送
くまもとの風『村上美香が訪ねる 熊本地震 南阿蘇村』 2019.2.8 放送 25分 総合・熊本ローカル

まつろわぬディレクター

真っ白な桜が散り始めた庭。そこに突き出た縁側で、その花びらのひとひらを取ろうと病床から這い出て手を伸ばす娘。だが手の震えがとまらず、花びらは地面ににじりつけられ、もみしだかれてしまう。

嫁入り前に末期を迎えた水俣病患者の娘の〈非業の死〉を語る、母親の言葉。

「あの貝が毒じゃった。娘ば殺しました。おとろしか病気でござすばい。人間の体に入った

会社の毒は]

その怒りと哀しみが、朗読と美しい映像を通じて見るものに迫る。そしてその言葉を聞き取った作家・石牟礼道子は、一文字一文字、娘の拾えなかった花びらと思い文章を書いてきた、と語る。

水俣の風土の中で、患者に寄り添いながら書かれた『苦海浄土』²⁾の世界を見事な映像表現に昇華したETV特集『花を奉る 石牟礼道子の世界』(2012年2月放送)。吉崎健の代表作の冒頭場面である。



石牟礼道子 (番組から)

初めて見たときの感動はいまでも忘れられない。その高い完成度と落ち着いた語りは、近代とは何か、そして人間とは何かを深く問いかけてくる。むろん水俣病発生の初期から患者宅に足を運び、どん底の苦しみと、尊厳を取り戻すための闘いを支えてきた石牟礼の深い洞察があつてのこと。だが難解といわれ、ときに近寄りたさを感じさせる石牟礼の信頼を受け、その思いを確かに受け止めることができた吉崎の存在なくして、あり得ないテレビ表現でもあつた。

彼が水俣に出会って20年の歳月が流れていた。

吉崎健は「まつろわぬ」ディレクターである。

大多数のNHK職員は花の東京への異動を心待ちにするものだが、吉崎は30年もの制作者人生のほとんどを自らの希望で地方に身を置き、25本の水俣病事件関連番組をはじめ、地域の放送番組をたくさん作ってきた。

一体、どんな精神の持ち主なのか。

2018年の夏、筆者はヒアリングのため初めて吉崎に向かい合った。そのときの会話記録を読み返すと、最初のやりとりの中に、その人柄の一端が表れていた。

(以後、筆者との会話体の表記のみ斜字とする)

—吉崎さんは、どういう家庭で育ったんですか、お父さんはどんなお仕事をなさっていたんですか？
(吉崎) いまは、そういう質問はもう駄目だという時代になっています³⁾。

ある意味で正しい。だが初対面で、8歳年上である筆者には、のっけから少し武骨な返答に感じられた。

「肥後もっこす」という言葉を思い出す。

編集者として石牟礼道子の『苦海浄土』などを世に出し、また市民運動のリーダーとして水俣病事件に深く関わってきた作家の渡辺京二は、著書『熊本県人』⁴⁾の中で、「もっこす」とは「一方の極では、時勢におもねることを知らぬ気骨者という一理屈ある姿勢を示し、一方の極では、人が右といえ左、左といえ右という、たんなるへそまがり」を意味する」と記している。

会話はこう続いた。

—ごめんなさい。もし嫌だったらいいんですが。
(吉崎) おやじは普通の公務員ですね。熊本大学の事務をしていました。おふくろは主婦というか、洋裁をしたりして。

—ごきょうだいは何人いたんですか？

(吉崎) 妹が一人。

こちらが結構です、といえしゃべり出すところなど渡辺の言う「へそまがり」にも思える。だが、ほのかなサービス精神も感じた。吉崎はこれ以降は雄弁になったのだ。本稿には残念ながら載せられない事例も含め、ほぼ腹藏なく制作者人生を語った。

異物を拒否して同一性を守る強い「免疫力」を持ちながらも、他方で自然体の「受容力」の

ある人。それが筆者の吉崎に対する第一印象となった。

相矛盾しそうな「もっこす」と「受容の精神」。それは九州から外に出ずに「水俣」にこだわり続けた吉崎の制作者としての人生を、読み解く鍵かもしれない。

と同時に、吉崎が誰の、何に惹かれて「水俣」に深く関わってきたか、その時、誰が、どんな役割を担って吉崎を支援したか、も知りたいテーマとなった。

原発報道を長く続けてきた筆者は、途中何度となく先輩から「続けないほうがいい」と忠告を受けた。「いたずらに不安を煽るな」とも言われた。水俣病事件の場合、テレビの制作現場ではすでに終わったこととされがちであった。その圧迫感を乗り越えて制作を続けるには、自分の中に強い拠り所が必要となる。

吉崎にとってそれは何であったのか。そしてそれをサポートする力はあったのか、それは誰だったのか。

番組が作られた道筋に沿って見ていこう。

何でも一生懸命にやってしまう新人

最初は嫌だった「ふるさと人事」

吉崎健は最初から地方にこだわっていたわけでも水俣に取り憑かれていたわけでもない。むしろその逆だった。

熊本市内で生まれ育った吉崎は県立熊本高校ではバレーボールに打ち込み⁵⁾、卒業後は東京の一橋大学の商学部に入學、ゼミではビジネスの国際マーケティング戦略という、いまの吉崎からは想像もできない、流行の先端を行く学問を専攻した。教師はハーバード・ビジネス・スクールでも教える、バリバリの経営学者⁶⁾だった。

吉崎は「華やかで、生き生きとした授業が面白くて」そのゼミに入った。だが、やがて違和感を抱くようになる。

『『鶏のコンタクトレンズ』というケース（スタディー）があった。発情期になると鶏は喧嘩するようになり、卵の産みが悪くなる。ところが赤いコンタクトレンズを目に入れると興奮を抑えて、卵を産みやすくなるっていうんです。僕は生態系が変わるんじゃないかと心配になったんですが、ほかのゼミ生は誰もそう思わない。驚きました。みんな本当に、いい悪いじゃなくて、ゲームをやってるんです」

「どうしても最後にお金をもうけるというところにいってしまう。何かずれる、ということが何回かあったんですね」

「お金もうけよりは、何かものをつくるほうがいい」という気持ちもあり、社会を幅広く見ることも大切に思った吉崎はマスコミを受験、結局NHKに入局することになった。そして言い渡された初任地は熊本放送局だった。

—熊本を希望したんですか？

（吉崎）いえ、僕らのときは人事の方針が新人は地元か地元近くに帰す、というものでした。ちょうどBSが始まるころで、よく言われたのは地方局不要論でした。BSが普及して基幹放送になれば、結局全部が全国放送になって地方局はいらなくなるという話でした。地元局がただ東京の番組を受けて流すだけでは存在価値がなくなる。自局のローカル番組をちゃんと作る力を持たなければと、地方の民放はローカルの割合を増やしていたんですね。民放は地元の人たちが地元に着して番組を作るけれど、NHKは何年かいたら転勤するから、愛着も感じないまま番組を作っている。それでいいのか、

ということで、そうなったと聞きましたね⁷⁾。

そのころ、NHKの熊本局は秋田局、静岡局とともに地域（ローカル）放送を充実させる「パイロット局」に指定されていた⁸⁾。そして2018年、熊本局は奇しくもまったく同じ名前の「パイロット局」に、27年ぶりに指名された。今度の地域放送の充実は、放送のネット配信をにらんで地元の民放が番組の充実を進める中、NHKも地域社会への貢献を高めることが目的という。BSがネットに変わっただけで、新人時代とまったく同じ流れの中にいると、吉崎は感じる。

「行ったり来たりでした。僕が新人のころは実験的にやっていましたが、上が替わったら、今度はローカル放送はあまりやらない時代になりました」



NHK放送文化研究所が地域放送の変遷を分析した研究によれば、NHK総合テレビの地域放送時間は1990年代初めに各局1日平均3時間近くに拡充したが、その後減少に転じて2時間ほどに落ち込み、90年代末から再び拡充に転じるが2000年代後半に再び落ち込むなど、増減を繰り返してきた⁹⁾。

「地元重視」といわれて故郷に着任しながら、4年後には東京転勤となり、その後長崎、福岡と各地を回ってきた吉崎は、今度こそ

「ローカル重視」が定着してほしいという。

30年前に話を戻そう。吉崎は故郷である熊本への赴任をどう受け止めていたのか。

「最初はすごく嫌でした。熊本に来たのは」「せっかく東京に出ていったのに、また戻ってくるみたいなのがありましたね」

「それと、熊本のことはもう知っているよ、という感覚ですよ。ただ、この仕事を始めたら、実際は何も知らなかったな、ということに気づいていくんですけれど」

音コンも高校野球も全力投球

吉崎が赴任した当時の熊本局には、現在はNHK大阪放送局の局長を務める有吉伸人や、2020東京オリンピック・パラリンピック実施本部・専任部長の宮田興など、のちにエリートとなる優秀なディレクターの先輩がいた。彼らは九州沖縄管内（ブロック）が放送エリアの30分番組『ワンダーランド九州』を福岡のデスクの指導下で次々と作り、勇名を轟かせていた。一方で吉崎は熊本ローカルの短い番組や、中学・高校生のNHK音楽コンクールの中継録画、高校野球の予選の中継などに地道に取り組んでいた。

「どんくさかった。要領が悪くて。適当にやるってことができなくて、僕は一つ一つ一生懸命やってしまうんです」

吉崎は音コンでは、「出場する生徒たちの都合を考えて開催の予定を立てないと、このままでは、生徒に演奏のCDを配付するなど配慮の細かい朝日新聞社のコンクールに参加者が流れてしまう」と危機感を手紙に書き、東京の担当プロデューサーに送った。

高校野球では民放の熊本朝日放送が中継を始めたことに刺激され、「絶対に民放に負けな

い」と叫んだという。

何であれ、これと決めたらまっしぐらに突き進む様子は、「スー・スー・ハーハー」と規則正しく2度鼻で息を吸って、2度口から吐きながら疾走する大河ドラマの『いだてん』、金栗四三かなくりしそウを想起させる。

そして「私、何でも始めると一生懸命になってしまうんです」と苦笑しながら話す吉崎を見ていると、何やらそんな自分の性格をネタにしているようにも感じる。

そこで、「もっこす」の用法について先述の渡辺京二が書いた文章の続き¹⁰を読む。

「(もっこすの) かんじんな点は、どういう用法の場合にも、一種の滑稽感をよびおこすということである」

「熊本県人の性格の特色は(中略)どこにでも存在する頑固な変わり者を、モッコスというユーモラスなイメージとして対象化していく意識のありかたにある」

よくわからないが、自己洞察を軽妙に語る吉崎の気質は間違いなく熊本県人の典型である、と渡辺京二も太鼓判を押しているようだ。

水俣に“つかまる”

タブーだった“水俣”

この章では吉崎が水俣病事件に出会う軌跡を、1991年に作られた2本の番組を通して描く。

その前に、それ以前の吉崎の水俣に対する意識はどうだったのだろうか。

—それまで水俣に関心はあったのですか。

(吉崎) いや、あまりなかったですね。熊本出身でありながら、まったく知らなかったのですね。

—高校のころとか、それなりに勉強したりとか。

(吉崎) 全然していなかったですね。普通の人と同じですね、いまの若者、東京とかで暮らしていて、水俣を知らない人と同じ感覚です。

—そんなものなんですか。

(吉崎) 当時、僕らが行ったときは、水俣におけるというか、熊本におけるかもしれませんが、タブーだったですね、街なかで「水俣病」という言葉を発するのもためらわれるぐらい。飲み屋とかでしゃべれない感じですね。だって、すぐ横に、もしかしたらチツソの人がいるかもしれない。

そのあと患者さんと親しくなって一緒に街を歩いていても、みんな避けて通るみたいな世界でした。要するに、表立って言うてはいけないみたいな、あるいは「特殊な人たち」という位置づけがあったと思いますね¹¹。

水俣病事件の報道量と関心の変化

ちなみに吉崎が中学・高校・大学時代を送った1980年代は、水俣病事件の歴史の中では、マスコミによる報道量が少ない時代であり、比例するように社会的関心が低下した時期だった。自らの恥を告白すれば、筆者自身、1981年から85年までの4年間、熊本を取材エリアにおさめる福岡放送局にディレクターとして在籍したが、水俣関連の番組は1本も作っていない。注目が集まっていない時期であったことと、問題が複雑で敷居が高く感じたことを覚えている。

ここで、毎年の水俣病事件と報道の歴史を見てみよう。図の報道量を表すグラフは、中京大学現代社会学部の成元哲教授が制作した朝日新聞の「水俣病記事件数」¹²をもとにしたものである。

1956年に水俣病の発生が国に報告された「公式確認」のあとも、チツソは原因物質である有機水銀の排出を認めず、国が食品衛生法によ

る漁獲禁止などの措置をとらなかつたため、メチル水銀を含む廃液の垂れ流しが続き、10年以上にわたり被害が拡大した。この時期、NHKは1959年に『日本の素顔 奇病のかげに』で初めて全国に水俣病の実態を伝えた。しかしその年の末に熊本県の斡旋で、チッソの責任は不問のまま患者団体との見舞い金契約が結ばれるなどしたため、マスコミ全体に「水俣病は終わった」との認識が広がった。その後8年間は何も報道がされなかつた。しかしその間にも胎児性水俣病患者が発見されたり、チッソの工場の中で有機水銀が発見されたりしていた¹³⁾。

1968年、国が正式に水俣病をチッソの工場廃液が原因の公害と認定。チッソは原因物質を出すアセトアルデヒドの生産を終了した¹⁴⁾。69年には29世帯、112人の原告がチッソに慰謝料を求めて熊本地裁に提訴、地裁は73年の判決でチッソの責任を認め、原告1人当たり1,600万～1,800万円の賠償をするよう命じた。この間、地元では「水俣病市民会議」、熊本では「水俣病を告発する会」など支援団体ができ、大阪のチッソ株主総会に患者が乗り込み、

また、東京のチッソ本社前に座り込んで直接交渉する様子などが全国に報じられた。その結果、チッソと患者の間で補償協定が結ばれ、熊本県による患者認定と連動して賠償金と医療費が支払われる仕組みができた。

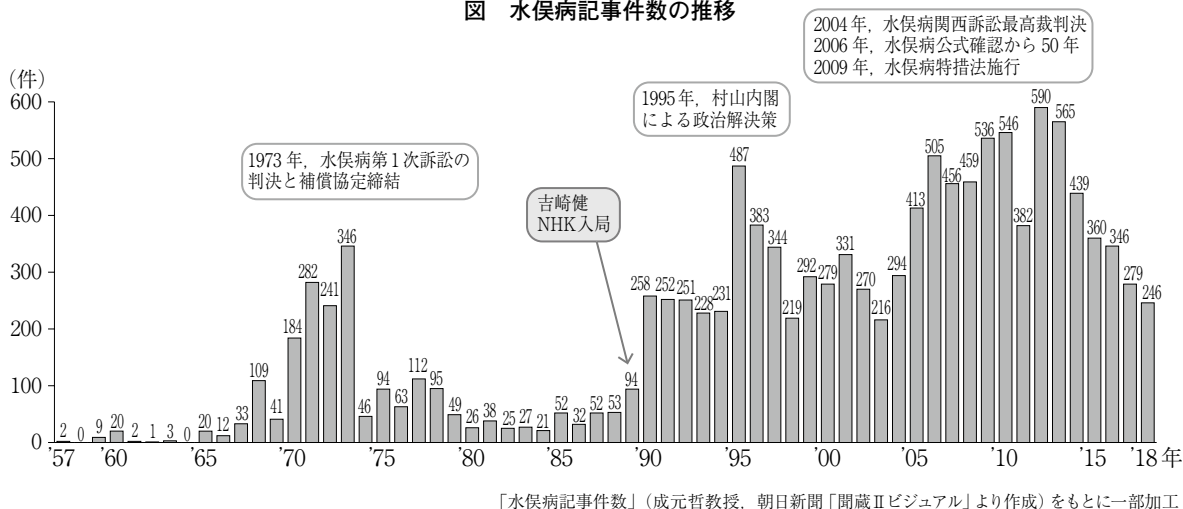
この1960年代の終わりから、有明海を舞台に「第3水俣病」問題¹⁵⁾も起こった73年までが、水俣病事件報道の最初のピークだった。そして直後に極端に報道が減り始める。

朝日新聞の報道を例にとれば、73年に年間346本あった記事は、翌年には46本に落ち込み、80年代終わりまで、年間50本以下が普通となり、多い年でも100本程度の時期が続く。

ただし、何も起こらなかつたわけではない。

1976年に熊本地検がチッソの元社長と水俣工場の元工場長を業務上過失致死傷の疑いで起訴、79年に熊本地裁が禁固2年・執行猶予3年の有罪判決、88年に控訴が棄却され刑が確定している。また77年には患者認定の基準が見直され、四肢の感覚障害に加えて、視野狭窄などほかの症状が確認されないと水俣病と認定されないことになった。

図 水俣病記事数の推移



そのため国の基準で認定されない患者が増、1980年には初期に被害の拡大を防がなかった国と熊本県の行政責任を問う、水俣病第3次訴訟と呼ばれる裁判が提訴され、本人原告だけで1,362人のマンモス訴訟となった。

そして、吉崎が大学を出てNHKに入局し、熊本に赴任してテレビの仕事をはじめた時期には、この第3次訴訟の判決が熊本や東京、新潟などの地裁で相次いで出されている。行政責任を認める判決と否定する判決が交互する中で、裁判所は国や県と原告の和解を勧告、だが、和解は難航した。この時期、さすがに朝日新聞の記事数は年間200本を超えるまで回復している。

しかし世界では冷戦の崩壊、国内では昭和天皇の崩御など時代を画する出来事が起こっていた。おのずと国内での水俣病事件への関心は低かった。

「水俣病は終わった」

そんな雰囲気は九州でも、そして熊本でも蔓延していた。しかし実際は、事件は未解決のままだった。

慰霊祭中継、衝撃の出会い

吉崎が“水俣”に出会ったのは偶然だった。入局から2年がたった1991年5月1日。その日は水俣病の公式確認から35年の節目の日で、水俣現地で行われる犠牲者の慰霊祭を生中継して夕方のニュースで伝えることになった。企画したのは水俣駐在の記者で、技術スタッフを率いて画作りや中継を取り仕切るディレクターとして、吉崎が駆り出された。

場所は不知火海を見下ろす小高い丘の上にある、「乙女塚」と呼ばれる慰霊碑のある広場。慰霊祭には古くからの支援者たちに交じって、水俣病患者たちも出席していた。初めて生で見

る患者さんたち。吉崎にとって教科書で知った程度でしかない水俣病事件の当事者たちが目の前にいる緊張感。

とりわけ、のちに親しくなる坂本しのぶをはじめ、数人ほどいた胎児性水俣病患者たちの存在は、強烈な印象だったという。

胎児性水俣病患者とは、母親の胎内にいるときに母親が魚を食べて摂取した水銀の影響で中枢神経が侵され、生まれつき言語障害や歩行・運動障害のある患者である。母親の胎盤を通して毒物が胎児に入ることは、医学上あり得ないこととされたため、当初は脳性小児マヒと診断されていた。だが、1960年代初めに熊本大学医学部の原田正純^{まさずみ}医師が患者宅を頻繁に訪れて診察を繰り返す中で、医学の常識を覆す事態が起こっていたことを証明、その結果、17人が胎児性水俣病患者として認定を受けた。

「当時、僕は25歳だったのですね。その胎児性の人たちが35歳ぐらいなんです、だいたい10歳上なので。だからまさしくまだ青春時代というか、いろいろな意味で、ナマというか、生きている姿を見て、その衝撃がだいぶ大きかった」¹⁶⁾

これは吉崎にとって人生を分ける出会いだった。そのときに受けた衝撃を言葉にして語るのはいまも難しい。意識の次元を超えた、感覚の世界の大事件とでも言うしかない、そんな体験だったのだろう。

そのせいか当日の記憶も、興奮の陰に隠れてよく覚えていない。ただ吉崎は、10分間の中継のラストカットの中で、坂本しのぶの姿にオーバーラップした海に沈む夕日が、すごく美しかったことは覚えている。

初めて水俣病患者と対面したとき人は何を思うのか。元NHK熊本放送局のアナウンサーで、その後終生、水俣病の研究と患者支援活動に身を捧げた宮澤信雄¹⁷⁾は、1968年に初めて12歳の胎児性水俣病患者と出会ったとき、「同じ人間なのにこんなひどい目にあわされている人がいる。自分自身が何か人間であることがつらくなるようなそういう出会いがあったんです」¹⁸⁾と語っている。

のちに吉崎が親交を結ぶ石牟礼道子の場合はどうか。水俣に住む一人の主婦だった石牟礼が、公式確認から3年後の1959年、水俣市立病院水俣病特別病棟で垣間見た、死を直前にした老いた患者の姿の描写である。

〈彼は実に立派な漁師顔をしていた。鼻梁の高い頬骨のひきしまった、実に鋭い、切れ長のまなざしをしていた。ときどきびくびくと痙攣する彼の頬の肉には、まだ健康さが少し残っていた。しかし彼の両の腕と脚は、まるで激浪にけずりとられて年輪の中の芯だけが残って陸に打ち揚げられた一根の流木のような工合になっていた〉

〈この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。この人(筆者言い換え)のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ〉¹⁹⁾

このとき以後の体験について、53年後に石牟礼は「患者さんたちに、どんどん“つかまって”いくから。そうじゃないと書けなかったし」²⁰⁾と語っている。

ともに水俣病事件に終生関わった宮澤と石

牟礼。共通するのは、初めて水俣病患者に会ったとき、自分が人間であることをつらく思ったり、嫌悪感を抱いていること。その結果、出会ってしまった責任を自覚していることである。

それにしても、前掲した文中の石牟礼の〈往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ〉とは、気になる一文である。

胎児性水俣病患者・半永一光

吉崎の場合、どのようにして水俣に“つかまった”のだろうか。

1991年5月1日の乙女塚の水俣病犠牲者慰霊祭のときには、話をしなかったというが、脳裏に宿った胎児性水俣病患者たちの残像が、吉崎を行動に駆り立てたことは間違いない。

一度熊本に戻った吉崎は翌日には再び水俣を訪ね、乙女塚のすぐそばに住み、前日の慰霊祭の世話役の一人で患者支援者だった砂田明を訪ねている。何らかの形で水俣につながりたいと思ったからだ。

砂田は患者たちがチツソ相手に激しく交渉を続けたころの1974年、東京での役者生活を捨て、水俣にやってきた。畑で野菜を作って自給し、患者たちの支援をするかたわら、各地に向いて一人芝居の公演を繰り返し、水俣病患者の救済を広く社会に訴えていた。

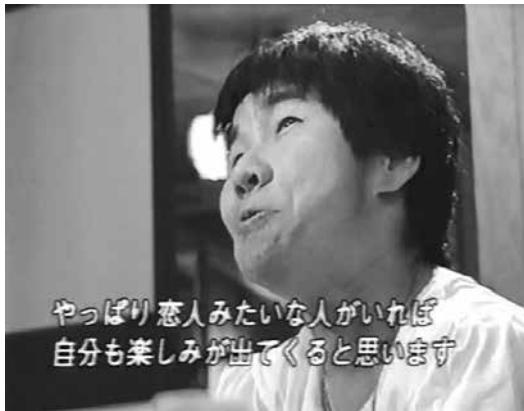
およそ1か月後、吉崎は砂田を主人公にしたローカル番組を制作して放送している。

WAVEくまもと『叫び～一人芝居・砂田明の水俣～』(1991年6月20日放送 28分 総合・熊本ローカル)

『WAVEくまもと』は熊本局が地域放送の充実をめざす「パイロット局」だからこそ設けられた、珍しいローカル枠のドキュメンタリー

番組だった。

この番組は石牟礼道子の『苦海浄土』にインスパイアされた砂田が、その一節を仕立てた一人芝居『天の魚』を公演する模様を軸に、砂田の来し方や毎日の生活、近所で無農薬野菜を育てる水俣病患者・田上義春や、砂田の妻エミ子のもとに機織りを習いに通う胎児性水俣病患者・坂本しのぶ²¹⁾のインタビューなどで構成される。



35歳になった坂本が「恋人みたいな人がいれば自分も楽しみが出てくると思います」と言いながらも「胎児性の子どもが生まれれば恐ろしいな」と語る言葉は、普通の人と変わらない患者たちの素の感情を見せる一方で、当事者たちにとって水俣病の脅威はずっと続いていることを感じさせる。

この番組で、吉崎にとって重要な出来事があった。胎児性水俣病患者・半永一光^{はんながかずみつ}との出会いである。

半永は砂田明にとって一人芝居『天の魚』の主人公のモデルである。つまり石牟礼道子の『苦海浄土』の中の「天の魚」の章に登場する9歳の胎児性水俣病患者の江津野空太郎少年^{えづのもくたろう}は、半永一光の幼少期の姿だった。

生まれつき言葉が話せず、歩行も運動もでき

ず、排せつすら自分で始末できない空太郎少年は、3人兄弟の真ん中に生まれたが、3歳のときに母親は夫である父親と3人の子どもを残して家を出てしまった。子どもたちと父親は、漁師を続ける祖父母とともに暮らす。

石牟礼は、この6人で暮らす母なき家族の家を訪ねる形で描写している。語り手は「あねさん」と石牟礼を呼ぶ実直で信心深い祖父、「爺さま」である。爺さまは自らも水俣病患者だが、「今になれば水俣病ちゃいいはなりまっせん。お上から生活保護ばいただきよって——。このうえ水俣病ばいえば、いかにも、^{ぜん}錢だけ欲っしゃいうごたる」と言って患者認定を求めず、婆さまと空太郎の父親である息子と3人で船に乗って漁に出かけている。なんとも心清き人なのである。

爺さまは空太郎についてこう言う。

〈空は、こやつあ、ものをいいきらんばってん、ひと一倍、魂の深か子でござす。耳だけが助かってほげとります。／何でもききわけますと。ききわけはでくるが、自分が語るちゆうこたできまっせん〉

〈でくればあねさん、罰かぶった話じゃあるが、じじばより先に、空の方に、はようお迎えの来てくれらしたほうが、ありがたかことございます。(中略) この子ば葬ってから、ひとつの穴に、わしどもが後から入って、抱いてやろうござるとばい。そげんじゃろうがな、あねさん〉

番組は砂田が仮面をかぶった一人語りで、この爺さまの哀しくてやりきれない、しかし孫への愛に満ちたつぶやきを再現する。そして爺さまが空太郎自身に呼びかける次のくだりが、ハイライトとなる。

〈わかるかい空。お前やそのよな体して生まれてきたが、魂だけは、そこらわたりの子どもとくらぶれば、天と地のごつお前の魂のほうがずっと深かわい。泣くな空。爺やんのほうが泣こうごたる。／空よい。お前がひとくちでもものがいえれば、爺やんが胸も、ちっとは晴るって。いえんもんかのい——ひとくちでも〉

この「天の魚」が書かれた当時からおよそ26年ののち、「ものがいえん」半永一光と会話をし、その意思を人々に伝える人物が現れる。本稿の主人公・吉崎健である。

いきなり言葉が聞こえ始めた

吉崎が初めて半永と会ったのは、1991年の5月、『叫び』の取材で水俣病患者のための施設



「明水園」を砂田明と訪ねたときだった。その様子を番組の映像からたどってみよう。

砂田は久しぶりに会う半永に、アンコたっぷりの回転焼きを買ってきた。車椅子の半永はおいしそうに食べる。やがて手に一眼レフの写真機を持ち、シャッターを切り始める。このとき半永は35歳になっていた。

『苦海浄土』に登場して以来、半永のもとには多くのジャーナリストや写真家たちが訪れ、写真を撮っていった。それは内外の有名な雑誌や写真集に掲載された。

例えば左下の写真は、水俣で報道写真家としての評価を不動のものとした桑原史成²²⁾の写した半永である。

利発そうな目の輝きが印象的だ。

空太郎少年こと半永一光は、坂本しのぶと並んで子どものころから水俣の象徴になっていた。ただ、言葉を発し思いを伝えられる坂本と違い、生まれてこのかた言葉を話せない半永は、自分の思いを伝える手段を持たなかった。

そんな半永がある日、知り合いのカメラマンから写真機を貸与された。以来、熱中。施設の仲間や支援者、来訪者の姿をとらえ、またイベントなどで外出する機会にシャッターを切っ



半永一光（番組より）

てきた。その数は19年で6,000枚を超える。中には施設を来訪した北川石松環境庁長官が、微笑みを浮かべながら半永を見下ろすような姿も写っていた。

砂田と会ったときも、半永は何か写真について言いたそうな表情だった。「あー、うー」、声が出される。

そのとき、画面に映らない誰かが「海？海？海を撮る？撮るのは？」という声を発した。その後、「自然を撮りたい」とも言う。

この場面、筆者は初見ではこの声は砂田のものだと断じていた。なぜならそのとき砂田も「自然？」と言っており、そのあとで「言葉もできるようになるのでは」と言って「あー、いー、うー、えー、おー」と発音して、半永にフォローを促したからだ。砂田は「言葉と写真、両方あるとよかもんね」とも言っている²³⁾。

その声が砂田のものと思ひ込んだもう一つの理由は、その場にいたもう一人の人間、吉崎が「半永さんと会話できるようになったのは、『叫び』の番組放送後、次の番組を作りたくて明水園を頻繁に訪ねるようになってから」と言っていたからだ。

実際に、半永と会話することはとても困難であると多くの人が指摘する。胎児性水俣病患者の番組を制作してきた熊本放送のディレクター、井上佳子²⁴⁾も、最初の番組で半永と会話した際は、長年水俣に住む支援者に同席してもらっている。

吉崎も、「言葉を発しきることのできる坂本しのぶさんや金子雄二さんは、慣れればわかるが、半永さんの言葉は言葉になりきれないので理解するのが難しい。だから表面的なことはともかく、本当に何がしたいとか、真意をくみ取れる人は支援者でもわずかしかない²⁵⁾と

言う。

だが、後節で紹介する番組『九州スペシャル 写真の中の水俣』における吉崎と半永の「会話」を見て、再び『叫び』を詳しく見たときに、筆者は気づいた。

「海が撮りたい」「自然が撮りたい」と半永の思いを声にして出していたのは吉崎健本人であったと。その低く太い声は同じだったのだ。

2019年1月、吉崎に再び会った筆者はこのことを尋ねた。すると吉崎は一瞬「本当ですか？」と言ったあと、「ああ、それは僕ですね」と認めた。

吉崎はさらに「最初に会ったときは、なんとなくそう聞こえたことを口にしたんだと思います。相手が何を言いたいかわかり取って、それを声に出してイエスカノーか確認するという、半永さんとの会話のスタイルができたのは、やはりもっとあとだと思います」と付け加えた²⁶⁾。

それは正しいだろう。ただし、吉崎が初対面で、あの爺さまですらわからなかった、半永一光の言葉になりきれない言葉を聞き取り始めたことは事実だった。

それは「もっこす」でもある吉崎が見せた、言葉を発せない人の思い、心の声をくみ取る、驚くべき「受容力」の一端であった。

そしてそこに、半永が爺さまの言う“魂の深か子”であることが、どう関係しているのか。筆者は関心を抱いた。

アドバイスに背中を押された

吉崎は『叫び』の取材で訪ねたとき、写真についていつまでも話したような半永の様子が気になっていた。

写真を指差して「うー、うー」という姿から、写真をもっとテレビカメラで撮ってほしい、と

言っているようにも思えた。だから吉崎は番組放送後も半永のもとに通った。そして半永を主人公に番組が作れないかと考え始めた。



岩下宏之
(現在はビジュアルオフィス・善, 制作部部长)

その背中を押してくれた人がいた。

当時、福岡局で九州沖縄ブロック²⁷⁾の番組『ワンダーランド九州』のデスクを務め、九州沖縄管内の若手ディレクターの番組制作をサポートしていた岩下宏之である。岩下は山口局、東京の番組制作局を経て1988年に福岡局に着任、以後、大分局や北九州局、関連企業も含め定年後のいまに至るまで30年にわたって九州から一步も出ず、デスク、プロデューサー、あるときは放送部長として仕事をしてきた。その岩下が、『叫び』を見て、こうアドバイスしてきた。

「支援者を撮るのではなく、患者に焦点を当てた番組を作ったらどうか」

半永に惹かれながらも、いささかの躊躇を残していた吉崎は、この一言で吹っ切れたという。番組の提案は、福岡で開かれた管内の提案会議に諮^{はか}られたが、当初、「話せない人をどうやって番組にするのか」「なぜ、いま水俣なのか」など難色を示す人がほとんどだった。ただ一人、岩下だけが、この番組を「やれる、やる

べきだ」と支持し、結果的に提案は通った。

そして岩下は、それによって吉崎はもう「後戻りできない道に入った、逃げられなくなった」と言う²⁸⁾。

岩下は熊本県三角町の生まれ、吉崎にとって熊本高校の先輩にもあたる。そしてこの先輩とのつながりは、その後いまに至るまで続き、要所要所で重要なアドバイスを受け、プロデューサーとディレクターとしてともに番組を制作していく。

日常生活にこだわる

半永一光を主人公に、その写真展が開かれるまでをドキュメントした『九州スペシャル 写真の中の水俣～胎児性患者・6000枚の軌跡～』(1991年12月12日放送 45分 総合・九州沖縄ブロック)。

この番組は大きくいえば二つの部分で構成される。前半では半永をはじめ、胎児性水俣病患者たちの日常が描かれる。半永については先述したこと以外では、新聞を読む場面が印象的だ。ここで吉崎は、「夕食後、半永さんは新聞を読む。彼は相手の言うことも、文字も理解する。ただ自分がわかっていることを相手に伝えられない」とコメントする。ただし「文字も理解する」というのは勇み足だった、といまは言う。通常教育を受けていないので、半永は文字を記号のように覚えているが、理解するとまではいけない、という。

だが、吉崎が半永が新聞を読めると錯覚したことは、画面を通して半永が時おり見せる理知的な眼差しを見るときとうなずける。半永は爺さまが言った通り、“魂の深か子”に思えるのだ。

次に登場する鬼塚勇治は半永と同じ施設で暮らす。20歳過ぎまでは一人で歩けたが、35



半永が撮影した鬼塚勇治(手前)(番組より)

歳のいまは車椅子でないと移動できない。上の写真は半永が撮った鬼塚の姿だ。

鬼塚はラジカセで演歌を聞くのが趣味だ。12年前には仲間や支援者たちと合力して熊本出身の歌手・石川さゆりを水俣に呼び、コンサートを開いた。その2年後に、頭痛がひどくなって頭の手術をし、脳から脊髄に管を入れた。それから身体能力が衰えている。

もう一人の胎児性患者・金子雄二は、実家で両親と暮らす。金子は朝10時の開店とともにパチンコ店に入り、夕方までパチンコに興じる。

それから歩いて居酒屋に行き、焼酎を飲む。周りの人からは「遊んでないで何かしなさい」



金子雄二(番組より)

といわれるが、自分でも思うようにならないのがつらい。

20代のころは、坂本しのぶなど仲間たちと街頭に立ち、仕事がほしいと訴えたこともある。大分まで行って電機部品の工場で働いたが、手足が不自由なのでついていけなかった。行き場もなく、やることがないから、パチンコや酒に浸っているのだ。

そして坂本しのぶは『叫び』のときと同じように機織りをする様子が紹介されるが、実家の食卓の場面で、80歳を超えた父親や母親は自分たちの死後の娘の行く末を心配していることが伝えられる。

これらの場面を通じて吉崎は、胎児性水俣病患者は認定され補償金をもらって、解決したように思われるが、お金をもらっても病気は治らず、実際は行き場がない、やることがないつらさを抱えていること、両親など支える人が高齢化し、他界したあとに誰が暮らしを支えるかを、本人も家族も不安に思っていることを伝えている。

そして吉崎は患者の日常生活を、金子のパチンコ店の場面のように、あえて誤解も覚悟のうえで赤裸々に紹介している。

吉崎との会話に戻ってみよう。

一日常にこだわりますね。大事にするというか。いつごろ意識するようになったのですか。

(吉崎)それは岩下さんの教えですかね。水俣病で、どうしても報道的にいくと、裁判とか何かあるときにそれを撮りますよね。そのときにわりと多い誤解ですが、例えば裁判所の前で、患者さんがたすきをかけて拳を上げたりしているのを見て、「元氣じゃないの」「また金欲しさにあんなことをやるんじゃないの」とか、言われたりします。

でも裁判所の前に行く患者さんは、家で漁業の人もありますし、夏ミカンを作っている人も多いのですが、本当に普段はきつくて、ちょっと働いたらグタツツとなっていたりする人が、あのときは頑張っていて行っていたりするのですね。本当の生活の中でいえば、ほんの一部分だけが出来事として報道される機会が多い。だから僕らはそうじゃない部分を出すべきじゃないかなと、つねづね思っています²⁹⁾。

困難また困難

患者の意志がすべてを動かした

『九州スペシャル 写真の中の水俣』の後半では、半永の写真活動を交えて、1974年、水俣湾に二重の仕切り網が張られ、1990年までに汚染の濃いところは485億円かけて埋め立てられたことを紹介。その一方で、国の責任を問う第3次訴訟で国が和解勧告を拒否している現況を伝える。

その後、環境モデル都市に指定された水俣市が主催する「産業、環境及び健康に関する水俣国際会議」が開かれ、その会場のロビーの一隅を借りて半永一光の写真展を開くまでの波乱のドキュメントが連なる。

だが、写真展開催の動きが現実となり、番組ロケが行われる前に、吉崎は大きな山を越えなくてはならなかった。

1) 支援者たちの説得

体の不自由な半永が、仲間の胎児性患者たちとともに写真展を開くためには、「支援者」たちの協力が不可欠だった。支援者たちは保護者である親族から承認を得て、入所する施設から外出許可をとり、車椅子を押し、寄り添って介護するなど、すべてに関わる。水俣には

70年代初めの最初の裁判のころから、関東や関西からたくさんの支援者が移り住み、黒子のように患者の活動を支えてきた。彼／彼女たちは水俣に暮らし、そこで育った子どもたちも第2世代の支援者となって患者たちを支えていた。このころまで残っていた支援者はいわば“筋金入り”，その数は30人を下らなかった。

吉崎はこの支援者たちを前に半永の思いを伝え、写真展開催への協力を呼びかけることにした。

—最初はなんて言われたのですか。

(吉崎) そのときは説明するのが怖かったです。ちょうど集まりがあるときで、20人ぐらいいたんですかね、乙女塚の「みんなの家」というところに。「半永さんが写真展をやりたいがっている」と言ったら、最初はみんな反対でしたね。要するに、まず、僕が番組を作りたいから半永さんをだましてというのが、みんなの考えだったんですね。利用されようとしている、テレビのために。吉崎がだましている。

—そのころは吉崎さんはまだ、その人たちと付き合いがなかった？

(吉崎) もちろんそうですね。

—じゃあ「どんなやつかわからない」みたいな。

(吉崎) そうですね、砂田さんの番組は作りましたが、砂田さんにしてもそうですが、あの人たちは本当に世の中と闘ってきた筋金入りの方々なので、鋭いし、厳しいですね。

正直、「もう駄目かな」と僕も思ったのですが、そのときは、総攻撃というか、総批判されたので。針のむしろ状態になって³⁰⁾。

まさに四面楚歌、絶体絶命と思ったそのときだった。

半永一光が突然拳を振り上げ、全身を震わせ、腹の底から絞るような大声を上げた。

(吉崎) もう、ちょっと駄目だなと思ったときに、半永さんが叫んだのです。それはもう本当に自分で叫んだ。

「うおおー、うおおー」と言いましたからね、ものすごく大きな声で。

それで「あ、そうか、半永さんが本当にやりたがっているんだ」と、それでみんなが理解してくれたのです。僕が勝手に言っているんじゃないで、自分がやりたいんだと。駄目になりそうだったからですね。その叫びはすごかったですね。

半永さんがすごいのは、しゃべらないけれども気持ちというか、強い気持ち、意志がはっきりあるということだと思った。そこから変わったのですね、「うおおー」と叫んでから、みんなが「本当にやりたいんだ」と、一瞬シーンとなった感じで、「半永さん、本気なんだ」と理解してくれた。

それでだんだん応援するほうに、みんな急が変わっていったというか、「じゃあ、やるか」みたいな感じになって。そこからはもう期間が短かったです。みんな協力してくれました。

2) 親族の反対

支援者たちの協力は取りつけたが、吉崎の取材の前途にはまだ大きなハードルが待ち受けていた。親族の反対である。

父親はすぐに了解したものの、ほかの親族が反対している、半永の存在を表に出したくないと言っている、といわれた。これから結婚や就職を控えた思春期の子どももいるので、水俣病患者が身内にいることを知られたくないという。水俣病は、病気のつらさに上乗せして、この差別の厳しさが加わり、当事者は幾重にも苦しむ。

差別は身近な親族から、チッソの企業城下町である水俣全域、さらには熊本県、その外側まで広がっていた。

吉崎は一軒一軒説得しようと水俣に向かった。そのときの心情をのちにこう記している。

〈電車が着いた時は夕方になっていた。重い心を引きずりながら、坂道を歩いていった。空が夕焼けに染まる頃、家の玄関前に立った。勇気を振り絞って、呼び出しボタンを押そうとするが、なかなか決心がつかない。／その時ふと、台所から聞こえてくる音に気づいた。「トントントントン……」。夕飯の支度をする音だった。突然、自分は悪いことをしているのでは、という思いに襲われた。この方にとって私は平穏な日常生活を乱す者なのだと。周囲から差別を受けたり、あらぬ噂を立てられたりして、苦しんできたかもしれない……。この方もまた水俣病に苦しむ被害者なのだ〉³¹⁾

吉崎はこのとき、とうとう声をかけられず、沈んだ気持ちを抱えたまま熊本に帰った。取材者である前に人の痛みに敏感で、誠実に思いをめぐらす吉崎の人間性が表れている。

このあと、吉崎は写真展への半永の強い意志を思い返し、再び親族を訪ねて粘り強い説得を続けた。親族からは「仮名にしてはどうか」という妥協案も出されたが断った。

(吉崎) 半永さんにとっては「俺はここで生きてるんだぞ」と言いたいために写真を撮っているんですね。隠されてずっと生きてきたので、そうじゃないことを伝えようということで。だから「半永一光」という人が生きているということ、ちゃんと伝えなければ駄目だ、と言ったんです³²⁾。

吉崎の懸命の説得の末、親族は子どもたちも含めて理解してくれたという。吉崎はさらに半永の撮った写真に写された胎児性患者たちも訪ね歩き、番組で紹介する許可をとった。そしてようやく、『九州スペシャル 写真の中の水俣』は放送に向けて走り出すことになった。

3) 行政の壁を突き破る

『九州スペシャル 写真の中の水俣』で圧巻なのは、写真展の開催を認めようとしない、熊本県と水俣市の行政担当者に半永と仲間である坂本しのぶたちが対峙し、形勢を逆転させて開催にこぎつける場面である。

水俣国際会議はもう始まっている。半永たちは写真展を開くため会場の一角を借りようと、県と市の担当者に会いに行く。だが、約束の場所に担当者は現れない。業を煮やした坂本しのぶが熊本県水俣振興室の室長をつかまえて、「本当に私たちは何のために写真展をするか……」と言い出すが、室長は「心配しなくていいよ」などといなす。

ようやく県とともに国際会議を取り仕切る水俣市企画開発部の部長が現れるが、「半永さんのお父さんは、写真展に一光さんが終日いるのは心配だから反対だ、と言ってる」と言い出し

た。遠回したが、父親の反対を理由に写真展は許可しない、と言ったのだ。これに支援者の一人が抗議した。「親父さんが心配というのなら、一光くんに直接言えればいい。県や市がお節介をやくのはおかしい」。

坂本しのぶも抗議、その場は紛糾していく。

水俣市の企画開発部部長は「保護者としてお父さんが外出許可とかやってるんですから」とすごむ。すると半永が「あああー」と大きな声を上げ始める。

やがて観光バスから国際会議に参加する海外の研究者たちが降りてくる。彼らは半永の姿を目にして、近寄ってくる。おそらく初めて目にする重度の障害の水俣病患者であったろう。すると案内役の県の役人が「もうよろしいでしょうか。時間があまりありませんから。みなさんバスのほうへお願いします」と声をかけて、先を急ぐことを促す。半永の存在が邪魔だと言わんばかりだが、この役人は半永に対し「今日は天気がよくて写真がいっぱい撮れてよかったですね」とお追従^{ついで}を言う。

はたして患者に会うこと以上に大事な視察などあるのだろうか。どうして行政は水俣病患者を国際会議から排除したがるのか。視聴者がそう思い出すところに、一人の外国人の研究者



半永、坂本と熊本県水俣振興室室長（番組より）



半永と握手するグランジャン教授（番組より）

が半永に歩み寄り、英語で話しかけた。

「会いに来てくれてありがとう。あなたたちの存在は今後の公害問題にとっても、とても大事だから、体に気をつけて頑張してほしい」

驚きながらも半永は自ら手を伸ばして、握手を交わした。デンマークから来たフィリップ・グランジャン教授。このときの出会いが生かされたのかどうかはわからないが、のちに北大西洋のフェロー諸島で微量水銀が胎児に与える影響の研究を行い、国際的な水銀研究の第一人者になる人物だった³³⁾。

差別と隠ぺいによって水俣病患者を壁で囲おうとする日本社会に対し、国際社会は何度となく扉を開ける役割を果たしてきた。1972年にストックホルムで国連主催の人間環境会議が開かれたとき、原田正純医師と坂本しのぶ、母親のフジエらが招かれ、世界中の研究者やメディアの前で水俣病問題を訴え、共感を得たことが、問題解決に向けた動きを後押ししたことを思い出す³⁴⁾。アメリカ人の写真家ユージン・スミスの活躍もあった。

そして、このときもそうだった。このあと一転して写真展の開催は許可され、仲間たちも手伝って飾りつけされた会場には、多くの市民



盛況となった写真展（番組より）

が足を運んだのだ。環境モデル都市に指定され、国際会議も誘致、水俣を観光地として浮揚させたいあまり、患者をそこから切り離そうとした行政の思惑は崩れた。

そして、水俣国際会議では患者の発言が一切ない運営に批判が集まった。一般市民からの質問として発言が認められた坂本しのぶは「私たちはもう35になったけれど、水俣病のことは何も解決していない、先生方にわかってほしい」とメッセージ、その後、支援者の代読で鬼塚勇治をはじめ胎児性患者たちが書いたメッセージも読み上げられた。

「お父さんもお母さんも年をとって大変です。僕が家に帰れば大ごとだ。水俣の市内のアパートみたいところにボランティアの人たちと生活したい」

これまで支えてもらってきた両親が高齢化する中、将来の暮らしを案ずる患者さんの心の内が、広く世界に明かされた瞬間だった。

またメッセージは半永の写真展に触れ、「私たちは何もできないと思われているけれど、みんなやれば何でもできるのです」と訴えた。

半永一光の強い意欲と、吉崎の粘り強い努力で放送にこぎつけた『九州スペシャル 写真の中の水俣』は、「水俣病はもう終わった」という風潮の中で隠されてきた未解決の問題、「患者たちの暮らしをどうするか」を焦点化し、未来に向けた生活の構築の大切さを社会に伝えた。

そしてこのあと、写真展開催で団結した支援者たちも動いて、水俣では患者が手作業でモノを作ったり、子どもたちと触れ合うなど社会との接点をつくる小規模多機能事業所や、患者が公的介護を受けられるグループホームの設立が始まっていく。

これは言葉が話せない半永一光が「うおおおー」と叫んで動かした“革命”だった。

吉崎はそれを、「胎児性患者は、ただ保護されるだけの存在ではなく、意志を持って生きていくのだという決意表明だった」³⁵⁾と解説する。

“魂の深か子”

その当時を振り返る吉崎の言葉を追っていると、吉崎が半永一光に深い尊敬の念を抱いていることがわかる。それは1959年に石牟礼道子が死に際の水俣病患者に出会ったときに感じ、1968年に宮澤信雄が胎児性患者を見て思った“同じ人間としての罪の意識”とは180度違う。言葉を発することのできない存在でありながら、強い意志と情熱で吉崎に働きかけ、万難を排して自らと仲間の胎児性患者の存在証明を行った半永を、真に尊敬する気持ちがそこにある。

それは相手とのコミュニケーションを通じて得られる“共有感”があってこそその思いだった。そして、相手と“つながった”と感じるときの“喜び”については、先述した熊本放送の井上佳子はこう語っている。

「坂本しのぶさんから私に携帯電話がかかってきたときは、本当に嬉しかった。私が彼女を理解していると思うから電話してくれたと思って」³⁶⁾

吉崎の場合、最初は“衝撃”だった出会いが“敬意”へと変わった。それを可能にしたのは何だったのか。

筆者は空太郎こと半永一光の爺さまが、かつて石牟礼に言った「ひと一倍、魂の深か子」という言葉を思い出す。

『広辞苑』によると「魂」には精神、気力や素質や天分という意味もあり、半永一光個人を

形容するのに決して不自然ではない。だが、この言葉の一義的な定義は「動物の肉体に宿って心の働きをつかさどると考えられるもの」とあり、「古来多く肉体を離れても存在する」としてと書かれている。

ここに至って、爺さまから「魂の深か」という形容を預かったのが石牟礼道子であることを思い出す。石牟礼は著書『苦海浄土』や『椿の海の記』などに、水俣や天草など不知火海沿岸では古くから生き物に宿る魂の存在が信じられ、さまざまな風習とともに暮らしの中に息づいていることを繰り返し書いている。

また、石牟礼は『苦海浄土』の中で死に際の老患者について〈決して往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ〉と書いている。

この〈わたくしの中に移り住んだ〉について、渡辺京二は〈彼女はこの時老患者（筆者言い換え）に文字通り、乗り移られたのである〉と断じている³⁷⁾。

そして天草に出自を持つ同じ不知火海の人として、〈山には山の精が、野には野の精がいるような自然世界〉に生きてきた石牟礼であるからこそ、乗り移られたのだ、と渡辺は指摘する。つまり石牟礼は巫女（シャーマン）の資質を持つと。

同じ熊本県出身といっても、熊本市内で公務員の息子として生まれた吉崎が、水俣の漁村出身の半永一光と、こうした意味で同じ世界を共有していた、とは思にくい。だが、とりあえず比喩としてならば、半永一光の魂が「移り住むようにして」吉崎と出会い、吉崎の言葉と体を借りて自らの望むところを実現した、と見ることもできなくはない。

吉崎自身はどう考えているのか。

一魂が深いというのは、吉崎さんの的にはどういうことだと思いますか。難しい言葉だと思んですが。(吉崎) そうですね。何ていうか、やはり優しいとか、思いやりがあるってことかな。最初のころ、写真展の準備をしたりするときに車椅子とか押すことになるんですが、当時はあまり取材対象者に深入りするなみたいなのもあって、局では「車椅子を押すな」と言われたこともありました。

でも実際、そんなこと言っただけで本当にみんな困っているから、(一人で越えられない) 段差もあつたりする中で。例えば写真展の準備をしたりするときも、トイレに連れて行って下の世話をしあげてくれますよね。しかも体が硬直しているから、おんぶして。若い僕らがそういうのをしないとみんな困るから。本当に大変だから、そういうこともしていたんです。

そういうときに半永さんはこうやって(筆者注: 片方の手のひらを顔の前に立てて) 拝むんですよ、「ごめんね」と言って。

一手は動かせるんですか、彼は。

(吉崎) こうしますよね。それで指は曲がっていてS字型なのですが、それでもこうやって「ありがとう」というか。表情も「本当にごめんね」という感じで。やはりそういうお互いにコミュニケーションが

あって、友だちというか、お互い信頼感が深まっていったというのはあると思います³⁸⁾。

吉崎はこの「魂が深い」という言葉を、「深い人間性」という、より一般的な意味でとらえているようだ。

再びの心労、緊急手術

『九州スペシャル 写真の中の水俣』は九州沖縄地域で1991年12月に放送され、好評であった。当初、半永も喜んでいて。のちにこの番組は「地方の時代」映像祭で優秀賞をとることになる。

ただ、全国放送にする際に苦しんだ。東京のプロデューサーたちは誰もがみな、「こんな終わった話を何をいまさら」と、けんもほろろだった。しかしその後、東京の番組制作局の文化番組部が『プライム10』という番組枠で受け入れてくれることになった。放送は半年後に決まった。

この『プライム10』の制作の最終盤で吉崎は倒れる。それは次のような事態の結果だった。

東京のプロデューサーは九州沖縄ブロックでの放送から半年先の全国放送だからと、追加の撮影を要求した。吉崎は半永を明水園の外に連れ出して追撮するのに親族の承諾を得る必要があるが、『九州スペシャル』放送後に親族の一部が、番組にクレームをつけていることを知っていた。熊本放送局の局長に電話をかけ「訴えるぞ」とまで言う人もいた。半永自身も浮かぬ顔だった。加えて、相談した支援者の夫婦からも苦言を呈された。

〈何かある時だけ来て、決まった放送日にあわせて撮影するテレビ取材のあり方そのものに対



半永一光(左)と吉崎健(2010年)

してだった。当時ちょうど、新潟水俣病を描いた佐藤真監督の記録映画『阿賀に生きる』が水俣で上映されていた。阿賀野川の畔にスタッフが3年間住み込んで撮影したこの映画と比較されたのだ。その通りだと思い、すみませんと言いながら、必死に頼むしかなかった³⁹⁾

その支援者の夫婦は結局、外出許可をとってくれた。

吉崎は半永に「反対している親族が怒って迷惑をかけるかもしれない」と言って、それでもやるかと念を押した。すると半永も「それでもやる」と答えたので、腹をくくって追加の撮影に臨んだという⁴⁰⁾。

福岡局での編集では、試写のたびにデスクの岩下宏之の怒声が飛んだ。当時「鬼デスク」として知られた岩下の、番組作りに対する姿勢は厳しかった。「なぜ今回は人に迫って撮れないんだ」。岩下の指摘は正しかったが、実際の現場での取材は思うようにはいかなかった。そしてどうにか編集を終え、ナレーションを書こうとしたとき、吉崎は猛烈な腹痛に襲われ、運ばれた健康管理室で吐血、町の診療所を経て救急車で民間の病院に運ばれた。そこで十二指腸潰瘍の穿孔性腹膜炎で内臓に穴が開いていると診断され、急きょ手術となった。十二指腸と胃の3分の2を切除した。医師に「生きてよかったね」と言われるほどの重症だった。

四方から追い詰められ、ストレスにより病に倒れた吉崎。一命は取り留めたものの、半年間の静養を余儀なくされた。一番つらかったのは、周囲からの反対で半永一光への取材ができなくなったことだった。

そして翌1993年夏、吉崎健は熊本局を去って転職のため東京へ旅立った。このときも吉崎

は^{とげ}棘のように心に突き刺さる言葉をもたらした。

「吉崎さんも、テレビ屋なのね」

別れのあいさつのとき、坂本しのぶが放った言葉だ。マスコミは都合がいいときだけ水俣に来て、手柄をあげたら転職していく。その繰り返しを見てきた坂本らしい皮肉だった。

吉崎はつぶやく。

〈「私は違います」と、その時は言ったものの(中略)、「テレビ屋」の一言はずっと心のどこかに引っかかっていた⁴¹⁾〉

“東京砂漠”の違和感

歯車と感じる中で

このときの東京通勤について、吉崎は希望したものだったという。異動先は番組制作局社会情報番組部。文化番組部という選択肢もあったが、自分はそれほど教養もないし、日常なものから番組が作れる『くらしのジャーナル』のある部を希望した。それはかつて岩下が在籍した『おはようジャーナル』の後継番組で、主婦層の視聴者が多い朝の生活情報番組。当時は社会問題を扱うことも多かった⁴²⁾。

通勤当初こそ、入社3年目で賞をとったディレクターとして部長からも専任部長からも「期待している」といわれ歓迎された。しかし、しだいに居心地が悪くなっていったという。原因はいくつかあるが、デイリーの情報番組で制作パンが短いこと、またロケは日替わりでカメラマンが替わるため、落ち着かないことだった。

(吉崎) すごく歯車感を感じましたね。カメラマンもそのときだけですよね、刹那的。それでどんなにこの人とうまくかみ合っていないと思っても、その何日間か、4、5日とか、そのロケ期間を乗り切ると

めに、なだめすかしながらも、とにかくなんとか乗り切るかみたいなの。それで、もう二度と会わなかったり。

例えば地方にいたらまた顔を合わせるから、もっと真剣に話し合ったり、議論したりしていたと思うのですが、そういう余裕もないです。だから進歩していかない。深まっていかない。自分じゃなくてもいいんですね、PD（注：ディレクターのこと）は。ほんと、自分が歯車になったような気がしましたね⁴³。

とはいえ、この環境でも吉崎は水俣の番組を作っている。『くらしのジャーナル “水俣”を伝えたい～胎児性患者は今～』（1993年10月6日放送 32分 総合・全国放送）。

吉崎が熊本で最初に作った水俣の番組『叫び』の主人公である砂田明が、がんのため65歳で逝去したのを悼んで作られたこの番組では、吉崎はスタジオに生出演してレポートしている。

このスタジオのキャスターは町永俊雄、上田早苗の二人のアナウンサー（下の写真の左側）だが、上田はのちに吉崎が九州に帰って水俣番組を作る際に、レギュラーとっていいほど毎回ナレーターを務めることになる。このときはどちらも知る由もないが、縁となる出会いだ。



VTRは不知火海に船を出し、砂田明の妻のエミ子と坂本しのぶが、故人が愛してやまなかった海に散骨する場面で始まり、東京を捨て、水俣に来てから通算556回、一人芝居『天の魚』の公演を続けた砂田の人生を描く。さらに坂本や金子雄二など胎児性水俣病患者の日常が描かれ、支援者仲間たちと患者たちが故人の最後の詩を詠んで偲ぶ場面が続く。

途中、『叫び』にはなかった砂田の言葉が印象的だ。

「いくつかの非常に具体的な患者さんとの接点がある。そういう人と一緒に人生を生きている。その中に芝居があるんで、芝居だけ別なのではない。芝居を含めて回ってるんですね」

「死んでいった人のメッセージを託された。劇の中に笑い方やお酒の飲み方、愚痴の言い方など、いろんな形で（生前の）その人たちのデータが残っているんだ」

1991年6月の最初の番組では描ききれなかった、役者であり、人生を水俣にささげた支援者であった砂田の生き方の機微をすくい取っている。また吉崎は砂田が訴え続けたこととして、「たとえ補償金をもらっても、かつての暮らしは戻ってこない。豊かな自然の中で人々が支えあって生きる暮らしそのものを、取り戻さなければならぬ」とコメントを書いている。

吉崎は『叫び』のときはまだ頼りなかった、人間を、水俣を見つめる眼差しを、その後の文字通り身を切る苦労の中でつかみ取っていたのかもしれない。

もっこす、そして、また転勤

しかし吉崎は、やがて『くらしのジャーナル』

にいられなくなった。あの「もっこす」ぶりを発揮してしまったのだ。

(吉崎) あるとき部長が、「言いたいことを全部言ってみろ」と言ったので、これで僕は何回か失敗しているのですが、正直に言ってしまったんです。

「いい番組を作れる気がしません。その場しのぎというか、場当たりで作っているような感じでは/みたいなことを言ったら、「おまえは期待外れだ」と言われた、目の前で。それでも、班を替えられたのです。

—議論もなしにですか。

(吉崎) そういうことを言うてはいけなかったのでしょうかけれども……。言われたことをそつなく、しかも効率的にこなすというのがいいPDの価値基準なのかなと思いました⁴⁴⁾。

その後、吉崎は『にんげんマップ』というトーク番組を担当、さらにNHK全体の業務改革プロジェクト「NEXT10」に出向となり、そのころにはすっかり減っていた地方局の地域放送番組を増やそうと試みたという。このとき吉崎は持ち前の「何でも一生懸命やる」精神を発揮して業務改革に邁進、自ら希望して出向期間を半年から1年に延ばしてもらったという。九州の師匠・岩下は「組織を変えるなんてできるわけないだろ。番組に集中しろ」とカンカンになって怒ったという。最後はお昼の生中継番組『ひるどき日本列島』にも在籍した。

そして1997年夏、吉崎は長崎への異動を命じられた。吉崎はこのときの異動について、ヒアリングでは複雑だった当時の心情を語ったが、その後、思うところがあって次のようなコメントを送ってきた。

〈くらしのジャーナル班を出て、他の班にいったことは、いま思えば、かえっていろいろな経験ができたし、いろんな個性的な人と出会えて、本当によかったと思っています。長崎への異動は、希望ではありませんでした。急に転勤と言われて、ショックだったことは事実です。ただ地域にこだわって番組を作り続けるという今の自分があるのは、この長崎への異動があったお陰です。望んだ場所ではなかった長崎が、その後、自分にとってかけがえのない、大好きな場所になりました⁴⁵⁾〉

やや唐突に感じるが、これもまた、吉崎流の時を経た「受容」、というべきだろう。その後吉崎は、戻ってきた九州の地でどのように再び“水俣”にアプローチし、展開していったのか、次号の後編で見ていく。

(ななさわ きよし)

注:

- 1) Japan Documentary Archive (通称: ジャパンドックス)。無料のメールニュースを配信し、ドキュメンタリーの劇場公開作品や映画祭、特集上映、全国の自主上映会、テレビ番組の放送予定などを紹介する任意団体。
- 2) 1965年から雑誌『熊本風土記』に連載された「海と空のあいだに」をまとめて、1969年に講談社から出版された『苦海浄土〜わが水俣病〜』。2004年より『石牟礼道子全集 不知火』が藤原書店から刊行された際、これに続く第2部「神々の村」、第3部「天の魚」が改稿・書き下ろしのうえに発表された。
- 3) 吉崎健ヒアリング、2018年7月19日より
- 4) 1972年に新人物往来社から刊行された『熊本県人』を再編集した言視舎版(2012年) P11より
- 5) 吉崎は中学、高校、大学でバレーボール部に所属。身長183cm。中学では生徒会長も務めた。
- 6) 竹内弘高 72歳。当時は一橋大学商学部教授。現在はハーバード大学経営大学院教授、一橋大学名誉教授。専門はマーケティング、企業戦略など。

- 7) 3)と同じ
- 8) 1989～91年に秋田、静岡、熊本の3局で実施した「パイロット放送局」は、地域に対する貢献のありようを探ることが主目的であった。(松尾洋司、河野謙輔「地域放送にみる編成・制作の方向～『NHKパイロット局』の試み』『放送研究と調査』1991年5月号より)
- 9) 村上聖一「NHK地域放送の編成はどう変わってきたか～放送時間、放送エリアの変遷をめぐる分析～」『放送研究と調査』2013年8月号より)
- 10) 4)と同じ P11～12
- 11) 3)と同じ
- 12) 成元哲、牛島佳代、丸山定巳「水俣病大量申請を生み出す社会的要因の探索」(中京大学現代社会学部紀要2-2, 2008年)には図として(1945-2008)期間の同様のグラフがある。
- 13) 高峰武「水俣病とマスコミ」原田正純編『水俣学講義』日本評論社2004年より
- 14) 東島大「なぜ水俣病は解決できないのか」(弦書房2010年) P256
- 15) 1973年5月22日の朝日新聞報道「有明海に『第3水俣病』有明海に患者8人」で注目された「水俣のチツ、新潟の昭和電工とは異なる第3の汚染源による水俣病発生」は環境庁の否定などでその後、誤報扱いにされた。
- 16) 3)と同じ
- 17) みやざわ・のぶお(1935-2012) 1959年、NHK入局、95年の定年までアナウンサーとして旭川、豊橋、熊本、静岡、秋田、京都、大阪、宮崎で勤務。1968年、取材を通して水俣病事件を知り、水俣病を告発する会、水俣病研究会の発足に関与。終生、被害者の支援、水俣病事件史の研究を続けた。著書に『水俣病事件四十年』(葦書房1997年)など。
- 18) 14)と同じ、P143
- 19) 『新装版苦海浄土～わが水俣病～』(講談社文庫2004年) P142,147より。なお、引用ごとに〈 〉を付した。以下同様。
- 20) 『ETV特集 花を奉る 石牟礼道子の世界』(2012年放送)より。
- 21) 1956年、水俣市湯堂で水俣病患者の父・武義、母・フジエの間に生まれる。姉・真由美は2歳で水俣病を発症して死亡。生後6か月たっても首が座らなかつたしのぶは、町の病院にかかると「脳性小児マヒ」と診断された。その後、原田正純医師により1961年に胎児性水俣病と診断され、翌年認定された。話をすることができたため、多くの報道に出て水俣病患者の苦しみや問題が未解決であることを訴えてきた。
- 22) くわばら・しせい(フォトジャーナリスト)。1936年、鳥根県生まれ。1960年、東京農業大学・東京総合写真専門学校卒業。主な著書に『報道写真家』(岩波書店1989年)、『桑原史成写真全集』(水俣、韓国、ベトナム、筑豊・沖縄の全4巻、草の根出版会1996～2004年)。
- 23) 吉崎によれば、これを機に半永に言葉と話させる練習が別の支援者の手で行われたが、成果はあがらなかったという(吉崎健ヒアリング、2019年1月26日より)。
- 24) 1960年熊本市生まれ、1983年熊本放送入社。アナウンサー、報道記者、ラジオ制作部を経て、テレビ制作部ディレクター。ハンセン病、水俣病、三池炭鉱、満蒙開拓青少年義勇軍、シベリア抑留などのドキュメンタリーを制作。2019年4月から長崎県立大学教授。
- 25) 吉崎健ヒアリング、2019年1月26日より
- 26) 25)と同じ
- 27) 九州6県と沖縄県全域を放送枠とする放送。NHK内部的には「管中」と呼ばれることもある。
- 28) 岩下宏之ヒアリング、2018年7月17日
- 29) 3)と同じ
- 30) 3)と同じ
- 31) 吉崎健 毎日新聞連載記事「水俣希望の命～胎児性患者さんとの20年」③ 2011年5月16日より
- 32) 3)と同じ
- 33) 吉崎健 毎日新聞連載記事「水俣希望の命～胎児性患者さんとの20年」④ 2011年5月23日より
- 34) 原田正純『水俣病』(岩波新書1972年) P216～226
- 35) 吉崎健 毎日新聞連載記事「水俣希望の命～胎児性患者さんとの20年」① 2011年5月2日より
- 36) 井上佳子ヒアリング、2019年1月25日より
- 37) 渡辺京二「解説 石牟礼道子の世界」『新装版苦海浄土～わが水俣病～』(講談社文庫2004年) P373より
- 38) 吉崎健ヒアリング、2019年2月16日より
- 39) 吉崎健 毎日新聞連載記事「水俣希望の命～胎児性患者さんとの20年」⑤ 2011年5月30日より
- 40) 39)と同じ
- 41) 吉崎健 毎日新聞連載記事「水俣希望の命～胎児性患者さんとの20年」⑦ 2011年8月1日より
- 42) 月～金の朝8時台、朝ドラが終わったあとの情報バラエティ番組枠で、1959年の『婦人百科』を皮切りに現在の『あさイチ』(2010～)まで、主に主婦層に暮らしの情報を伝えてきた。
- 43) 3)と同じ
- 44) 3)と同じ
- 45) 吉崎健 2019年5月14日付電子メールより